

市では、現在新たなまちづくりの指針となる新総合計画の策定を進めています。計画を審議する総合計画審議会の委員の皆さんに、これからのまちづくりに期待することなどを伺います。



東北福祉大学  
総合福祉学部  
社会福祉学科 教授  
阿部 一彦さん

### プロフィール

障害者福祉を中心に、社会福祉団体の役員や行政関連の委員などを兼任。仙台市総合計画審議会地域とくらし部会部会長、仙台市障害者施策推進協議会会長、社会福祉法人仙台市障害者福祉協会会長、日本障害フォーラム代表

**Q** これまでの仙台を振り返って思うことは？

**A** 私は特に障害者福祉の視点から、新総合計画の策定に携わっています。

仙台は当事者やボランティアによる障害者生活圏拡張運動の発祥地であり、車いす対応のトイレがデパート内に設置されたのも日本初。昭和48年には当時の厚生省から「身体障害者福祉モデル都市」の第1号に指定され、官民一体となって福祉のまちづくりを進めてきました。

平成26年に日本が批准した障害者権利条約には、「私たちのことを、私たち抜きに決めないで」というスローガンがあります。仙台市はこれを実践に移し、障害当事者の声を市政にも反映しています。

平成28年には障害者差別解消法の施行と同日に「仙台市障害を理由とする差別をなくし障害のある人もない人も共に暮らしやすいまちをつくる条例」を施行。身体障害、知的障害、精神障害、発達障害など、難病の方も含めさまざまな障害のある方々から不便なことや困っていることを伺い、条例づくりに生かしました。

このように仙台市では、さまざまな場面において当事者の目線を大事にしています。その一例が、地下鉄東西線です。計画段階から積極的に障害者の意見を取り入れ、列車とホームの段差や隙間を小さくするなど、車両や施設のバリアフリーを推進。車いす利用者のみならず、高齢者やベビーカーを使う親子にとっても利用しやすい地下鉄になりました。これは内閣府からも高く評価され、平成29年度バリアフリー！ユニバーサルデザイン推進功労者表彰で内閣総理大



地下鉄東西線では、当事者の声を取り入れ、車両とホームの段差や隙間を小さくしています

臣表彰を受賞しています。

**Q** 今後のまちづくりに期待することは？

**A** 仙台市は東日本大震災の経験がありますので、平時の暮らしやすさを追求するだけでなく、非常時に備えたまちづくりにも力を入れています。例えば震災の教訓を踏まえて整備された津波避難タワーには、車いす等で移動できるスロープ、プライバシーに配慮したアコーディオンカーテンなどを設置。これらも、避難経験者の声を基に設置されたものです。

また震災を契機に、障害者・高齢者の孤立防止や健康維持のため

の取り組みも重視されています。その対策の一つとして有効だと考えているのが、外出の機会をつくり出すこと。安心して出掛けられる場所や交通手段が整備されていけば、体を動かす時間や楽しみが増えるはず。元気な暮らしにもつながることが期待されます。

仙台に根付く福祉のまちづくりへの思いは、今後も継承していくべきものだと審議会でもお話ししています。障害者が暮らしやすいまちは、高齢者や子どもにとっても生活しやすい環境。障害者福祉の視点を取り入れることで、誰もが安心して暮らせるまちづくりを目指しています。

## 総合計画ってなに？

皆さんは未来の仙台の姿を想像したことはありますか。技術革新やグローバル化の進展により、私たちの暮らしは日々変化を続けています。そうした時代にあって、目指していくまちの姿やこれからの10年間(令和3年度から令和12年度まで)の取り組みを示すものが新総合計画です。

新総合計画には、誰もが暮らしやすい地域づくりや子育て支援のほか、経済の活性化、環境にやさしい仕組みづくり、道路・公共施設の整備など、皆さんの暮らしに密接に関わる取り組みが盛り込まれます。

まちづくりは、市役所だけではなく、多様な価値観、新しい発想を持ち寄りながら、市民の皆さんと一緒に進めていくものです。

この機会に、皆さんも仙台の未来を考えてみませんか。



▲ 総合計画審議会での審議の様子